

〔自由民権運動と東京専門学校の開校と校風〕

福井 淳

(宮内庁書陵部主任研究官)

*司会：

それでは恐れ入ります。福井先生、お願いいたします。

皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました福井と申します。本日は早稲田大学の創立125周年の記念すべき集まりでお話をさせていただくということで、大変光栄に思っております。

さて、今私の立つこの講堂の名前の由来となりました小野梓と早稲田との関係について、大隈重信が後年このように言っています。小野君は学校の母、我輩はさしずめ保母である、と。すなわち小野が学校を生み、大隈が育てたというふうに述べております。その言葉どおり、東京専門学校創立にあたっての両者の果たした役割は比類のないもので、また関係は極めて緊密であったと言えます。

当時、時代は自由民権運動の高揚期でした。そして、この運動は政党を誕生させました。すなわち、1882年（明治15年）の東京専門学校創立の半年ほど前に、立憲改進黨が生まれています。その改進黨の党首は言うまでもなく大隈重信であり、党の趣意書は大隈のブレーンであった小野梓が起草しております。そして間もなく大隈は東京専門学校の創立者となり、小野も学校の創立及び運営の中心となりました。それ故、自由民権運動と東京専門学校との間には密接な関係があった、と見ることができるでしょう。その関係を歴史的に検討していく中で、早稲田の伝統である、特に自由と進取の精神、その原点について考えてみたいと思います。

1の「首都東京の民権運動と立憲改進黨」に入ります。まず、東京専門学校創立の背景からお話いたします。東京の民権運動についてです。東京では、都市の知識人による民権運動が盛り上がりました。都市の知識人とは、ジャーナリスト・教員・代言人・官吏といった新しい時代の知識人たちでした。彼らは民権結社というものを結成し、幅広い活動を行いますけれども、中でも民権思想についての高度な学術研究と、民権新聞や雑誌の発行という情報活動は、地域の結社にはほとんど見られない、都市ならではの大きな特色でした。また、参加した官吏たちの多くは元老院や文部省といった中央官庁に属しておりました。つまり、政府の一員であったわけです。そのような、まだ混沌とした時代というものが背景に存在しておりました。そうした結社の中で、1つは福沢諭吉が慶應義塾系の民権派集団、いわゆる三田派ですけれども、その集団が運営する三田演説会、もう1つは元老院の沼間守一、島田三郎らによる嚶鳴社、この2つが東京の結社の双璧でした。例えば自由党の思想的な柱となる植木枝盛も、青年期には何度も三田演説会を傍聴し、民権思想を学びました。この三田派と嚶鳴社はどちらも立憲改進黨の結成に参加し、党内の有力グループとなります。それゆえ、改進黨の中央での基盤は両者を基礎として極めて強固なものになったのでした。

また、大隈派官吏として活躍し、「明治14年の政変」で下野した小野梓は、小野に私淑する高田早苗、岡山兼吉ら、東大学生グループと共に政党結成を構想します。そして、鷗渡会を結成し、改進黨結成に参加しました。彼ら鷗渡会員はほとんどが82年7月に東大を卒業しますが、政府は彼らを政党に関与させたくないということもあって、早くから積極的に官界に勧誘しました。しかし彼らは官界での立身出世ではなく、青年らしく信じるところに従い、立憲改進黨へと参加したのです。

さて、民権運動の発展の中で、大きな主義主張を軸として国民が結合する確固たる政治組織、つまり政党の必要性が高まります。1881年（明治14年）に板垣退助を総理とする自由党が結成されたことは周知のとおりです。翌82年の明治15年4月には前年の政変で政府を追われた大隈を総理とする立憲改進黨が結成されました。この他、政府を支持する政党として立憲帝政党も生まれております。改進黨の結成にあたっては、既に見たように小野梓と東大生のグループが構想の核となります。さらに小野は大隈と、その側近で大隈と共に下野した河野敏謙ら元政府高官に働きかけます。高官らは修進社派という名前で結成に加わります。また、小野は高田早苗らの協力を得て、党結成のための基本的な文書も起草しました。そして、福沢たちの三田派も、小野と並ぶ大隈ブレーンの矢野文雄を中心として、東洋議政会派として結成に加わります。三田派と双壁だった嚶鳴社も、また結成に参加します。こうして1882年4月16日、小野らの鷗渡会派、元政府高官の修進社派、三田派の一派である東洋議政会派、そして嚶鳴社派の4グループがそれぞれ緩やかに結合するという形で改進黨の結党式を行い、大隈を総理に、小野梓らを役員に選んだわけです。そして、それから半年後には改進黨の勢力は東京を中心にして、北は東北から南は九州にまで広がったと自負するような、全国的な発展を示しました。

この頃、もう一方の自由党が、党員数こそ着実に増加させつつも、総理板垣の外遊問題で党内は深刻な分裂状態にあったのとはまったく対照的でした。この改進黨の、まさに上げ潮ともいえる勢いも、東京専門学校の誕生を大きく後押ししたと言えます。

次に、2の「立憲改進黨派の教育観」に入ります。その改進黨の政治的主張ですが、まずは社会のミドルクラスを主体に、正しい手段で政治を着実に改良していくという穏健なものでした。小野は改進黨が日本の世論をつくり、それをもって日本を改良することを期待するなど、政党というものの公共的な役割に着目し、重視していました。また、党のスローガンには、人類の幸福の全う、国内政治の改良、地方自治の基礎の建設等の具体的な6項目を掲げております。それは、自由党がまず大きな団結を最初に目指すという抽象的な方向であったのに対し、欧米の政党のように、議会で政策の実現を目指す、という方向で議会開設前からいち早く準備を始めるという着実なものであったわけです。そして議会構想としてはイギリス流の二院制を唱えて、自由党が主張したフランス流の一院制とは好対照であったということは知られているとおりです。

さて、改進黨の修進社を除く3グループは、党に合流する前に既に民権思想の学術研究の実績を持っていました。ですから、そのグループごとに独自の教育の見識を持っていたのです。

まず三田派の教育観からみてみましょう。それは福沢諭吉の教育観に代表される、有名な実学による一身の独立が一国の独立に通じるという実学重視の姿勢とそれによる個人の自立こそが国家独立の基礎であるという、教育が個人と国家をつなぐとみる教育観でした。次に嚶鳴社の教育観です。党のスローガンを訴えた1882年5月の改進黨政談大演説会での嚶鳴社リーダー、沼間守一の演説にこういうものがあります。社会の進歩、その発展に伴って選挙権を徐々に広げようという趣旨のものです。沼間は言います、現時点では選挙権に多少の制限を設けるが、その制限は「智力」、つまり知恵の力による。例えば大学を卒業した者には、財産がなくても直ちに選挙権を与える。また中等以上の学校教員の資格を持つ者にも、や

はり財産がなくてもまた同じく選挙権を与えようと。つまり、議会開設をにらんで、選挙権の基準を当時多かった財産による制限論ではなく、教育の程度とする、という政治上の教育尊重論でした。

最後に鷗渡会の教育観で、小野梓の教育観に代表されるものです。例えば、小野は、1884年の論説「教育論」において、教育を盛んにするのは「国家の繁栄を謀るの随一」である、国家の繁栄は教育の繁栄による、と述べています。小野にとっては、教育こそが国家の基礎である、という考えであったわけです。以上、それぞれ優れた考え方でありました。こういった考え方もまた改進黨の中に流れ込んで合流した、ということが言えると思います。

それでは、3の「開校式と建学の精神」に入ります。1882年（明治15年）10月21日、東京専門学校は政治経済、法律、理科の3学部を擁して開校式を挙りました。それに至る開校の準備は小野梓の日記によれば、7月7日の夕暮れに小野が大隈を訪ね、「早稲田学校之事」を相談したというあたりから始まります。この日、小野は午後改進黨の事務所で党務を処理し、その後、大隈邸に向かいました。そして、早稲田のことを相談して帰宅すると、今度は大著『国憲汎論』の原稿執筆を行っています。つまり、学校の設立準備は小野-大隈ラインで開始され、また小野から大隈への相談は、改進黨の党務や民権的な著作『国憲汎論』の執筆の中で併行して進行していったのです。学校の規則も小野がこうした中で起草していきます。

さらに7月21日の小野の日記には、大隈邸で、大隈、小野の他、改進黨幹部の河野敏謙、島田三郎、高田早苗らが学校のことを相談し、あわせて改進黨のことに話が及んだと記されています。つまり、大隈以下、改進黨の幹部たちが学校と改進黨のことをあわせて相談していたわけです。そして10月の、特に中旬からは学校に関する小野の大隈への相談は頻繁になります。例えば15日の日記には、改進黨の月例会議があって、そこで党総理としての大隈と学校の開校式について相談しています。公的な改進黨の会議の機会すらも借りて学校の準備が進められていたわけです。そして開校式前日の20日には小野が大隈を訪ね、共に「明日開校之準備」を為すと記しています。さらに当日の午前中にも2人で準備を行っております。

このように東京専門学校開校の準備が強固な小野-大隈ラインを軸に、自由民権政党である改進黨の活動や小野の民権的な著述活動ともしばしば交錯しつつ進められていったということは、学校の性格にも少なからぬ影響を与えたと推測されます。

さて、しかし開校式には大隈は出席しておりません。それは、下野したばかりの大隈が関わるのが学校の経営に支障を来すことを恐れての心遣いからであった、と言われていています。さて、当時大隈改進黨と学校との関係はどのように映っていたのでしょうか。政府党である立憲帝政党の機関紙の1つに、『東洋新報』というのがありますけれども、10月21日の記事の中でこのように言っています。「牛込区早稲田なる改進黨の専門学校」と。まさに政府にとっては、学校は改進黨のための専門学校とみえていた、と言えるのではないのでしょうか。

一方、民権派内ですが、自由党の機関誌『自由新聞』は、20日の記事で、ある噂を紹介しつつ開校を予告しています。すなわち、「予て大隈重信氏の発意にて府下で早稲田村なる同氏が所有地内に設立さるゝとの噂ありし彼の私学校」、それが開校式を行うというものでした。この自由新聞の伝えた噂は、大隈をあたかも西郷に、早稲田を鹿児島島の私学校に重ねた、最も憂慮すべきものであったと言えます。こうした政府や世間の疑念に配慮し、大隈は出席を見合わせたのでしょう。

しかし、不在の大隈は、既に見たように、小野とともに学校設立に尽力していました。小野はこの晴れの場に大隈の不在という状態が生じたことにたまらない思いだったのではないのでしょうか。なぜなら、開校式での有名な小野の祝辞は、まず「本校の恩人大隈公」で始まっております。冒頭と結びの部分で、実

に12回も大隈の名前を出して、大隈が学校の恩人であることの宣伝に努めております。小野は大隈の学校への関与を隠すよりも、むしろ反対に堂々と公言することで世上の憶測を打ち消そうとしたかのように見えます。

さて開校式ですが、校長の大隈英麿が「開校之詞」を朗読し、日本語による促成教育と「学問の独立」という建学の精神を簡潔に伝えました。そして、その精神をより詳細に、明快に説明したのが小野粹の祝辞でした。小野の言う骨子は次のようなものでした。一国の独立は国民の独立に基づき、国民の独立はその精神の独立に根ざす。よって国民精神の独立は実に学問の独立に由る、と。これは、教育は国家の基礎であるという小野の持論を発展させたものであり、また福沢のいう、一身の独立が一国の独立に通じる、という考えにも近いものでした。

そして、この独立のためには東大のような外国語での教授からも独立する、としました。小野は、原書に依存する教育は勉学の気力を弱らせ、普通の学科や専門の学問を終える妨げとなる、とっていますが、この発想も小野の持論であったし、高田早苗の進言でもありました。こういう「学の独立論」こそ、一つの自由と進取の精神であったといえるのではないのでしょうか。

そして小野は、この独立ということについて、祝辞の最後に、東京専門学校をして政党からも独立させることを欲するとの、一つの希望を付け加えています。つまり、学校と改進黨とは別個の存在たらしめよという、特に政治からの独立を謳うものでした。それは改進黨内においても、例えば先ほどみたように、嚶鳴社派が政治上の教育尊重論をもっていたようなことと一線を画し、また政党に干渉する当時の政府からも学校を遠ざけ、つまりは政治の荒波から学校を守ろうという考えであったように思われます。それはまた民権運動のただ中であって、政党人が学校を作る上での大いなる知恵というものであったのかもしれない。

しかし、このくだりですが、よく読むと、あくまでもそのようにあれと小野は期待しているのです。改進黨の幹部である小野自身がそのようにさせましようとは明言しておりません。つまり、改進黨との関係についての種々の疑念を打ち消す意味もあったとは既に指摘されておりますが、小野も現実には改進黨との関係の難しさを実感していたがゆえに、期待するという表現になったのではないのでしょうか。

さらに気になるのは、小野の祝辞が政党からの独立を実は早稲田だけではなく、広く東京大学や他の私学にも求めると続けていることです。そこには、立憲帝政党への対抗、それは実質的には保守化する政府への批判であったとみることができます。すなわち、学校開校の前月である9月、文部省の少輔九鬼隆一、少輔というのは当時の文部省のナンバー2ですけれども、彼が教育では修身を重視するという演説を行い、それを『東京日日新聞』などの帝政党の機関紙が全文掲載し、また社説でも取り上げて強く支持するという、教育方面での一つの事件が起きておりました。これに対して危機感が改進黨内に広がり、三田派の機関紙『郵便報知新聞』は10月11日付の社説で、教育は終身の事で、政党は移ろうものにすぎない、と批判しております。また、嚶鳴社派の機関紙『東京横浜毎日新聞』は11月7日付の社説で、一国の教育は一国の教育なり、一政党一党派の私に可きものにあらざるもの、と厳しく批判しています。小野が政党からの独立を広く、官学・私学全体に望んだのは、こういった当時の目の前の大きな教育の危機的状況への対応であったと推測できるのではないのでしょうか。

最後の4、「草創期の学校役員・教員と民権運動」に入ります。それでは、問題の学校と改進黨との関係について、草創期の役員、教員の顔ぶれから具体的に押さえてみましょう。お手元の資料の表1をごらんください。表1の上段ですが、現在の理事的な存在と見られる「議員」という肩書きの役員たちがおります。そこには、改進黨を構成する先ほど申し上げた4グループのうち、当初は3派から、鷗渡会派で

は小野梓、東洋議政会派では矢野文雄、嚶鳴社派では島田三郎といった錚々たる幹部たちが代表として入っていました。また、在野法曹界のリーダーである鳩山和夫、朝野新聞社長として名声を博する作家・ジャーナリストの成島柳北も加わっておりました。

その一方で、校長に大隈の養子英麿を大隈代理の形で据えているものの、議員には河野敏謙ら大隈側近の元政府高官たちをまったく加えていない点が注目されます。小野の祝辞にもかかわらず、大隈の影響を最大限懸念した人事といってもいいでしょう。

次に講師です。表1（本書49ページ）の下段にある講師は、小野の鷗渡会派とその機関紙『内外政事情』関係者が完全に独占しました。それについては大隈が鷗渡会員に東京専門学校への招聘の話を持ちかけたということで、特に大隈の意向で鷗渡会員が教員を担うことになったわけです。

そこで、表1全体での改進黨員です。立憲改進黨と書いてある方が党員で、全16人の役員・教員のうち何と12人まで、割合で実に75%が改進黨員でした。つまり、東京専門学校とは改進黨という民権派中央政党が各派をあげて、ほぼ全面的に協力し、支える学校として誕生したと言えるのです。そこには当時の改進黨の上げ潮の党勢、その基盤としての鷗渡会派の持つ青年の若々しさ、三田派の持つ慶應義塾の伝統と経験、そして嚶鳴社派の活力が持ち込まれ、それが学校の土台となった、といっても過言ではないでしょう。例えば自由党ですが、1つの学校をもついに持ち得なかったのです。そして当時存在した有力私学においても、創立者や役員・教員や民権結社との関係は強かったものの、政党がここまで密接に関わった学校は1つとしてありませんでした。これ以後もそうした学校はなかったのです。つまり、東京専門学校とはそういう意味からも、唯一無二の希有な事例、言わば民権運動の唯一の嫡子たる高等教育機関であったわけです。

また、その議員・講師らが多彩な民権運動の経験を持つものであったことは表1の右側の運動参加歴からわかります。遅れて84年に修身社に代わった秀島家良を別として、15人が開校時までに改進黨とは別個に、東京、また一部は横浜での何らかの民権結社、民権運動に参加した経験を持っておりました。中でも、鳩山・矢野・島田などの経歴は群を抜いており、こうした実践経験や同志的な結合も学校に流れ込み、それが学校の教育文化を豊かにし、学校運営を助けたであろうことは想像に難くありません。

さらに、議員は豊富な教育経験者でもありました。例えば鳩山和夫は既に有力私学である専修学校の準創立者であり、成島柳北は幕末に徳川将軍家定・家茂の儒学の教師でありました。矢野文雄は慶應義塾教員から大阪、徳島の慶應義塾分校長を務め、義塾最初の理事員、これは現在の理事ですが、この時期、東京専門学校の議員と慶應の理事員を兼務しております。島田三郎は文部省にかつて出仕して、80年の教育令改正に中心的に携った経験がありました。このように、議員のほとんどは教育経験を積んでいました。人選に当たっては、こういった側面も考慮されたと考えられます。

この議員ですが、今度は表2を見ていただきたいのですが、84年から86年の変遷のように、この間、84年の成島柳北の死去、86年の小野梓の死去を挟みながらも、着々と増強されていきました。新議員には従来の3グループから有力幹部が増強されていきます。しかし、表2で最も注目すべきは、84年に大隈側近の修進社派の北畠治房が、さらに大隈に近い前島密も加わったことです。それは政府の反応などから察して、大隈の存在がもはや懸念されないと判断された結果ではなかったでしょうか。開校から約2年を経て、党内4グループすべてが議員にそろったのです。ここに至り、ようやく改進黨と東京専門学校との安定した関係が確立された、と言えるのではないのでしょうか。

最後にまとめたいと思います。東京専門学校は立憲改進黨の勢いを背景に、改進黨派の良質の民権的教育観や、また教育・学校経営・教育行政の経験、さらに三田派や嚶鳴社派・鷗渡会派から、直接議員また

講師として有為の人材を結集させることで、十分に改進黨の良質の部分を受容しました。しかし、その上で、そうした各グループの政治的側面とは一線を画し、その一方で政府・立憲帝政黨の教育への保守的な干渉をも巧みに排除しようとし、学校を守ろうとしました。東京専門学校はこうした工夫に富んだ、かつ独自のスタンスを選び取ったことで、小野梓や都市の民権運動がつくった自由、かつ進取の精神を基礎に据えることができたのではないのでしょうか。これが早稲田の伝統の原点と呼べるものではないのでしょうか。ご静聴どうもありがとうございました。(拍手)

○司会

ありがとうございました。

自由民権運動と東京専門学校の開校

はじめに

一 首都東京の民権運動と立憲改進黨

- ①都市知識人の運動 —三田演説会とおうめいしゃ嚶鳴社—
- ②小野梓ら鷗渡会の登場
- ③立憲改進黨の結成

二 立憲改進黨派の教育観

- ①立憲改進黨の政治構想
- ②立憲改進黨派の3つの教育観

三 開校式と建学の精神

- ①影の主演 大隈重信
- ②小野梓による「学問の独立」論の射程

四 草創期の学校役員・教員と民権運動

- ①立憲改進黨との密接な関係
- ②民権と教育の経験の継承
- ③学校と党との関係の安定化

おわりに

〔報告の要旨〕

自由民権運動の高揚期に誕生した立憲改進黨の党首は大隈重信であり、改進黨趣意書は、ブレーンである小野梓が起草した。大隈は東京専門学校のまさに創立者となり、小野も学校設立および運営面の一中心となった。それゆえ、自由民権運動と東京専門学校の間には、密接な関係があったといえよう。

すなわち東京専門学校は、立憲改進黨の上げ潮の勢いを背景に、改進黨派の良質の民権的教育観を受容し、また改進黨内のグループである三田派や嚶鳴社派、また鷗渡会派から、現在の理事に近い議員また講師として有為の人材を結集させ、その教育・学校経営・教育行政の経験も継承した。

しかしその上で、「学問の独立」を宣言し、改進黨各グループの政治的側面とは一線を画し、政治運動の荒々しい動きから学校を守ろうとした。またその一方で、政府＝立憲帝政党の教育への保守的な干渉も退けようとした。

東京専門学校は、こうした独自のスタンスを選び取ったことで、自由な、かつ進取の教育を積極的に推し進めることが可能になった。早稲田の伝統は、このようにして自由民権運動との密接な関係のなかから生まれていったのである。

福井 淳

1955年、横浜市に生まれる。80年、早稲田大学教育学部社会科卒業。85年、明治大学大学院博士課程満期退学。早稲田大学社会科学研究所特別研究員、明治大学文学部講師を経て、宮内庁書陵部主任研究官となり、現在に至る。その後、早稲田大学第一文学部講師、自由民権研究所客員研究員も務める。専門は日本近代史で、とくに立憲改進黨系の都市の自由民権運動。

表1 東京専門学校創立時の役員・教員と民権運動

役職名	氏名	所属政党・グループ名	民権結社・運動等への参加歴
校長	大隈英麿	立憲改進黨	交詢社
議員	鳩山和夫		共存同衆、精研社、日本法律会社、講法學社、明法志林社、代言業、全国府県會議員懇親會
〃	成島柳北	〃	朝野新聞社、馬耳念仏社、交詢社
〃	小野梓	〃 (鷗渡會)	共存同衆、交詢社、鷗渡會
〃	矢野文雄	〃 (東洋議政會)	三田演說會、報知社、講談會、自衛協會、横浜演說會、交詢社、三田政談會、東洋議政會
〃	島田三郎	〃 (嚶鳴社)	新聞會社、嚶鳴社、自衛協會、共存同衆、毎日新聞社、東京經濟學講習會、東京講習會
幹事	秀島家良	〃	
講師	岡山兼吉	〃 (鷗渡會)	共話會、政談演說集會の建議、鷗渡會、代言業
〃	山田喜之助	〃	戊寅會、鷗渡會、代言業
〃	砂川雄峻	〃	戊寅會、鷗渡會、精研社、代言業
〃	高田早苗	〃	晚成會、鷗渡會
〃	山田一郎	〃	共話會、政談演說集會の建議、代言業
〃	天野為之	〃	晚成會、鷗渡會
〃	田中館愛橘		共話會、『内外政事情』紙上署名人
〃	石川千代松		『内外政事情』紙上署名人
〃	田原栄		『内外政事情』紙上署名人

註 表1・2は、拙稿「早稲田と自由民権」(『早稲田大学史記要』第30号)の表に加筆・修正したもの。『早稲田大学百年史』第1巻、同 総索引・年表、大日方純夫『自由民権運動と立憲改進黨』、高田早苗『半峰昔ばなし』、拙稿「多彩な結社の活動」(『近代日本の軌跡2 自由民権と明治憲法』)、松崎欣一『三田演說會と慶應義塾系演說會』などにより作成。

表2 東京専門学校草創期の議員増強と民権運動

84.7 就任	所属政党・グループ名	民権結社・運動等への参加歴
北島治房	立憲改進黨 (修進社)	修進社、明治協會
前島密	〃	明治協會
砂川雄峻	〃 (鷗渡會)	※表1参照。加えて明治協會にも参加。
秀島家良	〃	修進社大阪分社、明治協會
小川為次郎	〃 (鷗渡會)	交詢社、鷗渡會、壬午協會
85.6 就任		
沼間守一	〃 (嚶鳴社)	法律講習會、嚶鳴社、自衛協會、講談會、横浜演說會、法律學舍、九臯社、毎日新聞社、共立學舍演說會、東京講習會、明治協會
藤田茂吉	〃 (東洋議政會)	報知社、三田演說會、交詢社、三田政談會、明治政談演說會、東洋議政會、明治協會
86.12 就任		
市島謙吉	〃 (鷗渡會)	共話會、政談演說集會の建議、鷗渡會、壬午協會
犬養毅	〃 (東洋議政會)	報知社、猶興社、三田演說會、交詢社、三田政談會、東海社、明治政談演說會、豈好同盟、東洋議政會、明治協會、朝野新聞社
高田早苗	〃 (鷗渡會)	※表1参照。加えて明治協會にも参加。
田原栄		※表1参照
三宅恒徳		『自由新誌』総理 ※三宅雪嶺次兄
坪内雄蔵(遺遙)		晚成會、『内外政事情』に寄稿、政治小説刊行
牟田口元学	〃 (修進社)	修進社、明治協會